

諸國  
奇談

東遊記後篇冊二

庫	文	閣	内
一 七 二 函	一 冊	三 一 五 八 九 號	和 書 類

内閣文庫	
番號	和 31589
冊數	20 ( 7 )
函號	172 86



東遊記後編卷之二

龍燈

南谿子著



越中<sup>越中</sup>新<sup>新</sup>川<sup>川</sup>郡小眼目山と云る寺あり眼目山と云くサツシ  
 山と云くは次宗<sup>次宗</sup>肯<sup>肯</sup>と禪<sup>禪</sup>師<sup>師</sup>と道元<sup>道元</sup>禪<sup>禪</sup>師<sup>師</sup>の  
 才<sup>才</sup>子<sup>子</sup>大徹<sup>大徹</sup>禪<sup>禪</sup>師<sup>師</sup>の<sup>の</sup>基<sup>基</sup>なりけ大徹<sup>大徹</sup>禪<sup>禪</sup>師<sup>師</sup>は山<sup>山</sup>成<sup>成</sup>存<sup>存</sup>す  
 村<sup>村</sup>山<sup>山</sup>神<sup>神</sup>龍<sup>龍</sup>神<sup>神</sup>助<sup>助</sup>力<sup>力</sup>して多<sup>多</sup>くの奇<sup>奇</sup>持<sup>持</sup>ありし今<sup>今</sup>小<sup>小</sup>玉<sup>玉</sup>  
 里<sup>里</sup>毎<sup>毎</sup>年<sup>年</sup>七<sup>七</sup>月<sup>月</sup>十<sup>十</sup>二<sup>二</sup>日<sup>日</sup>は秋<sup>秋</sup>ハ眼<sup>眼</sup>目<sup>目</sup>山<sup>山</sup>の<sup>の</sup>松<sup>松</sup>持<sup>持</sup>梢<sup>梢</sup>と<sup>と</sup>燈<sup>燈</sup>の<sup>の</sup>  
 ぼりさる<sup>さる</sup>ハ立<sup>立</sup>心<sup>心</sup>の<sup>の</sup>施<sup>施</sup>頂<sup>頂</sup>より飛<sup>飛</sup>来<sup>来</sup>りま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>ハ海<sup>海</sup>中<sup>中</sup>より飛<sup>飛</sup>  
 来<sup>来</sup>り皆<sup>皆</sup>松<sup>松</sup>の<sup>の</sup>梢<sup>梢</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>是<sup>是</sup>成<sup>成</sup>心<sup>心</sup>燈<sup>燈</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>け<sup>け</sup>の<sup>の</sup>  
 一<sup>一</sup>りの<sup>の</sup>人<sup>人</sup>と<sup>と</sup>例<sup>例</sup>年<sup>年</sup>尺<sup>尺</sup>寸<sup>寸</sup>争<sup>争</sup>ふ<sup>ふ</sup>世<sup>世</sup>宗<sup>宗</sup>龍<sup>龍</sup>燈<sup>燈</sup>と<sup>と</sup>海<sup>海</sup>中<sup>中</sup>より大

東遊記後編卷之二

のありあまたしき寺のごとくは地神地を交ふあり  
と松乃稍小なる希有なるものなりせし越前の越前  
寺の庭にも地神の松とて例年正月元日の夜か  
らゆあるとまわりの人は皆白事なり

新写

越後国新写ハ佐渡川まかの川と海合々海入るあり海  
口をくのとて武里乃所ハ川幅廣く事々武里ハ川の  
とてこの川のほとく入り海のごとく岸より岸まで水は深々  
は深とつものあり千石武石の大船とつどもづくまで  
も自は出入りせし海川港とてハ日お第一ともいふ魚

川幅の廣きも天下無双ともいふ此の川佐渡川といふ  
此川の水ハ信州犀川流慶川とてこゝに吾光寺の色也  
既小在海を天流川程の大にありしを更新写すといふ六  
十里川魚とて間大小折川流き入るゆ急かるとりりの大に  
とゆりたしと地は平地平坦なり由急流とて穩ありて流  
にひびくとも移りたり越して地は流るべき谷ニコ土也  
川のおもをも柔めて崩入り次第なりはまると水はゆるり  
る小大崩るるとも形も水は常小茶色小濁り余ハ三  
条とて下より新写と十里の水深ハ佐渡川の院ありまじ  
ゆは川の流れ委ぬるなり是の城下よりハ新写と十

六里と四百石横瀬の川舟常小一日小上下と濠小運漕小使  
利なり事と海内又かる川なり一里大なる事日本才一な  
る小ま名なきうらぶら北陸僻遠の作小あつて持小ま川平  
穂小て舟好ぶらゆ急なり一余新浮乃町より又小船て  
平ま芝田の本端とつれおとみ里なる流は川の入はくして侍  
ひと急小なる度小亦ハ武里小狭らあてあつ狭く入の西  
従小武三十石の取とあつ是ハ本川筋小あつるゆ急なり流ま  
ま移りして流まぶらごとく一は日持小暗天おてあ岸の糸色  
うたりく入はく小蓮の堂もあつ夏月水水面一様の花小  
て見事なり事つけんとあつと我新浮の町より舟は流せん

荷華と貴一又ハ納涼なりお熱華と小お船中より四方  
尺後ともあむと東山く六七十里と尺後して小解一西山  
ハお扱る里のわ小佐渡心尺ゆを方ハ奥州會津の心尺扱ら  
のどく四面お屏さる地也て北海の廻船出入乃夫倭なりハ  
戦後才一の熱華の作あてま橋あつて小ま又戦後一  
國のあふおけ濠小あつゆ急流大名藏多く建小北方吾國の事  
ゆ急小流のまハはあつ小舟の舟乃拾(陸地を吾海く  
海とハ十月より三四月止まてハ船と出乃事あつハ小ハ夏一季  
位なきとといふ)

三馬屋

奥州三馬屋は松前湾の津まで津持領か後小ありく  
 日本赤川の隈ありひく源義経の館のぐま振夷(後)  
 らんと此西とありひく小波るべき順風ありりりり投日這  
 るありありふたふたきく小持の祝音の像と海産の志ひと  
 小まきく風波移りり小忽風うりり恙なく松前の比小波  
 聖あひぬま像今小い西の寺小ありて義経の風移りり  
 祝音といふ又は赤漆小大の岩ありて馬屋のぐまかこ  
 へ並へり是義経のる成立ありり一おとこ是ふよりて此處で  
 こる屋と称とあり我相此西を松前へ海と十里ありひくこ  
 る屋のあふ小あまきとマツヒとて実出するこあり是より七

里ぬりけしども松前への後海は皆こる屋より後らあり此  
 宿りたやとくは海平小あふ大河のぐま流り流り船  
 前二筋ありあ成マツヒの汝といふ次と中の汝と云北流  
 自神の汝と云皆備は流るまどとを流るるなりて汝先の  
 粉イ平里及つり昼夜とも昔小あふり東もあふりサ  
 し引往來ありありあり海中小マツの天流成かありらぐと  
 下の方松前の館とあおのまへの君れ海とてはこは  
 合してき館とありありありありありありありありありあり  
 屋の前の海産大なる屋ありありありありありありありあり  
 小松前へ後ら船は五極の祝風の後時と足合とて航と十

冬小陸り伴のほのふとまはひりろ極風海申へ抛入て  
こゝろまふ矢成村りども横小糸切ら車まりとぎか  
少くも風たゆじ時さけは少押あさるりなりりき  
ろ時さふ十里はつをる流きつて大海に  
汝の好ひかゝりゆるれ少あつておとまじむ事  
前まおしておをる車ハ人カもいふられこと  
ともしろごとく書ふあらまあるのまてま理解し  
こまんかゝのどらおゆ急我も松前へはらんとこ  
小エリー遠めをりりも順風をりりては海をすりて  
そぬ毎の順風をり車とあり又二十日二十日と順風

つとありつよしゆ急ふ反ツ此後海をては昔らら  
云南約の田名約のサイ或ハヲコへの遠より松前  
ハ心をつくと天氣もれは海城隔て秘はのほりてのも  
こちりよと云南約のサイヲコへのきハ三馬屋あ  
少兵あつる地より三馬屋より山の方小藍のど  
ふもちよ是蝦夷地のこと又田名約のヲコへの遠  
とよこまきまふ日本のおらる海もれも漢小あ  
友他國のふと名城ふとむと  
狐の義理  
越後村とらをまふ百姓又婿小娘三人おてり天明己年



竹園

卷之二

五



東遊記

卷之二

五

の事なりし中家内小荒と物と我とあひなきは  
と後小まじく荒小飼ひ或不足と取つて庭先小控り  
小まじくを小の控り小ありと彼荒成食ら小三子この  
よつろ嵐まじく控りと毒小ありと死つて親控り  
ある小瓜大小恨と嫁娘小たけと色くせうとに  
粉りあやとけい小死をり又小次の娘小とり付と一月  
けろりの方小二人の娘死しぬと父母を控りと  
庭先小まじくといつろ嵐と控り小はり小めと教  
とのゆやとあつらに母小むとばり食ひと死つ  
是元来海小子のあやとつらり成け方の志とこのあふん

ゆけ方の愛子二人までと方殺すと小いある事とや  
とまじくあやとつらり事と恨つらり小は親控り  
乃即ちあやとつらりを聖晩を先小老控り足死し居  
つら百姓夫婦をゆとつらり控り方と恨つらり  
小を死つた小つらり死つらりとつらり石行の  
つらりとつらりは小つらりつらりつらり親と小刺  
一鬼と賣り家業と控りつらりつらりつらりつらり  
若此もつらりつらりつらりつらりつらりつらりつらり  
付伝ふ

後名



奥州東北の地は日本東北の極東の地なり野郎に於ては  
 どもを人と思はれり又其神佛の信を執中候時を  
 神として信じて居り余は其の神とて思ふ事あり  
 老翁に余は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 祖又代々傳へたる所なり余は其神とて思ふ事あり  
 方の父のいふ所は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 るる衆海の人とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 中來こそ其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 衆海を去風とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり

つうらの名は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 なまばは其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 在所の名は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 又神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 せり其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 の一

三本本意

支南の地の廣大なる所なり其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 地の廣大なる所なり其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり  
 いふ事あり其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり余は其神とて思ふ事あり

身一に系在元二日海南北より海程ありと云ふ方小く  
衆もがく樹木と一本に元えに家小雲霧の聖系也  
西平のハけるのくといふも四方小目下がむまは方南  
知る次ふ七日を往來せし事ありと云はれし其地  
といふありし七の戸を奉りおも五十丁道四里すありて  
東あり程度一けりも只一面の芝系にけりかゝる地  
ハ四方のくく見ゆる西ハ幸田山あり西南ハ十二四里  
隔ててこの戸嶽尺也東南ハ女里計と云ふてくハ戸嶽  
四又遠のあり十里隔てて盛岡の岩磐山尺也かくのく  
四方豁然として數百里一生小得し度遠なるの大海と

ゆるごとく右岩磐と尺ゆりて其地の度平らりと岩磐  
のふるごとく云ふ一又一戸より沼宮内まで一驛のあり申  
祀小なると云ふ七里ありこれ小なるを老人傳てて里人の  
継ぎてお化のふしはありて今伝はるる民もあつて地を  
北北田名給といふ田名給の地はふるむ千石のく地小田名  
給の地は北海へ出流するくあり里計とありて是より  
中國西のく一々の地面よりも度一程り小なる地小なる  
ふと云ふ是もく人民のありて伝はるるある南の地は海廣く  
山深く平地も右と云ふく廣莫れは新小園と云ふは  
よくの田畑千百万石のく一と云はるる土のく人民も

丁南田終小拾山万石の作と定らるる土地に  
 肥なり其耕作のくまをて増し一丁南田の地小南より廣く  
 一丁戸二戸三戸七戸八戸九戸種を地とて戸の字の付  
 たり地あり戸ノ字と皆へと信之皆に里に堂或は七八里と南  
 て山に揚う川とありて要害の地之多くに城治とらん西今ふ  
 くも戸ノ字の付らるるに皆町地なりと雖も僅古瀬夷と皆  
 一國而本所なりやと云ふ事はれぬ今ふ事とてと授て名あり  
 一丁南田の地あり一丁南田の地ありと云ふ北の所なり又南田の  
 地は今も六丁地を里と云ふ余初も都より右の右に成るる所  
 廿五里二十里に於ていふ事なり一丁南田の地ありと云ふ事  
 平にらむ事ありはる事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

南田の地より一丁小七八十里又二百里と徑の可なり  
 ありと云ふ仙臺領津屋領も南田小と云ふ地あり六丁地を  
 里と云ふ六十丁地大道を里と云ふ地あり小里數と云ふ  
 小まき人大道よりありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
 風多し事あり

綿本

綿本の古語は南田領とは地領との境山溪と云ふ所の傍  
 小ありと云ふ事あり東南の方へ入るる所あり  
 一丁南田の地ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

所より一々四年の年々火をててま焼失せりとい  
又南部三戸のあの方の在申より移居の古伝とて見え  
使あつて一見の地ありと云はるる滋の古伝なりと云  
名新古伝と伝傳あり上音の地ふまありは怪事なり  
かゝる河の國もては転田を古人のせびりまておと  
尺もさあひそくハ極色の地ありて外が候と云  
心算の和をさしりてその名の元は流す津所也昔は  
くこの里は流木の塚を計く東のままの年母田の川  
かたは南部の内にも南部は種田道ハじりハ流す  
人の伝ありてその名もさしりては百半計りてハかく

今く日本の名もさしりてハかく

龍鱗

越後系魚川の近在黒姫山の麓姫川の原水小池にて  
大なり出たりし所あり先年姫川大洪水の時は引く後  
獵師彼岩の邊へ引く小川とて知れとて巨く滑るる胎の  
くさ物多く付居たり又岩の角の所小たある鱗とて  
此のあらぬ付たりまてさるる守はあり行わは流る小  
押あさねありては岩角小降くとては種あり種あり  
まらあふり流は姫川ハ流のどくさるる流りて大に  
川は流るの勢ハ小にありありのを押流るる人ハ

梳師（かみ）と（かみ）と西向う今ふお持せりく皆誰の様といふ

鮮珠（せんじゆ）

山よりあり水よりし水よりあり珠より水よりあり  
一（い）と下和（げわ）が玉合浦の珠ありし侍も名をいひ  
と教（しやう）く字え傳（つた）へて世の寶（たから）とてし中（な）一君子温潤の徳  
に（に）おとしはきり我物（われもの）は昔より格（かく）あふ名をいひて  
す神代小曲（かみしろ）むさぐさいど今古家より伝（つた）へてる小格（かく）  
海愛（うみあい）とよおともえんば又珠（たま）とて名をいひ川（がは）とて名をいひ  
只越後小在（せご）なり出（で）新厚（あたら）のくく傳（つた）へり一ハけをいひて  
小福徳厚（せふとくあつ）といふてありけは小珠（せうじゆ）とてく先（ま）る真（ま）あり

大さこ四尺（よんしゃく）よりありあり九月（くがつ）のりうまる夜ハおし一（い）と貝（かい）口  
と開（ひら）ふと珠（たま）たさ冬（ふゆ）の程（ほど）をありんとえんてく暖（ぬる）の洞（ほら）  
と皇（みかど）のおよりごく光明（こうみょう）赫（せき）をくるとく水面（すいめん）ありてめくく  
是（こゝ）おそづく肘（ひじ）の愈（よ）ち只（ただ）伝（つた）へる水（みづ）座（ざ）小（せう）伝（つた）へる或（ある）は長（なが）伝（つた）へる  
形（かたち）づら水（みづ）とて名をいひてくおそるを貝（かい）ありて名をいひてく  
足（あし）のりも二（ふた）とて同（おな）一（い）程（ほど）にハおそるつた貝（かい）とてりありてく  
るもののおきどく昔（むかし）よりありて名をいひてくおそるありてく  
けぞくおきとく取（と）事（じ）あり又ありて名をいひてくおそるありてく  
ハ貝（かい）といひて名をいひてく唐（から）お持（もち）てりてくいひて名をいひてく  
もとめは名をいひてく



け 後海原といふは城はわく尤大なる深く竟り六七里  
小舟りて江洲の湖水と見るごとく一かまも漁念は日蓮は  
るを舟にひきつひて湖ほとほと深く名付りしのもあり化  
風ありて雲のりりしは城垣は度出のにはあつたは似く度々  
るふりて志も學とてあつるごとく一かま担する土地なり  
其中小大の流りて土地も平なりおる川の流も急なり  
あつるはあある人舟に入りて海ありとあるは城垣は  
よこはゆき舟のりりしは城大なりて池里三里四百里ハ  
六里四方なるもあつたの山は地狭くそと山房もあつた  
土地よき下あき川ありて海とてたてたてた入のり

ちる一 舟をりては城とては考ふ小洞を船も草は地  
と湖といふ者別城垣の深と同一極くはあふ皆長江小舟  
湖あり北方の地は地面ふる下あつて山高く険崖なりゆき  
小黄河小湖あり平なり日影もくはあ城垣の深ありて化  
るよそ一舟も羽の八節浮常流の度浦杯がし似たり  
さう実り又実あり

養軒の詩

飛馬川の波浪尾國の雪羽川の鬼津陸の錢湯とあつ  
幸万吾方のと先事平度くありては旅中の艱難ハ  
ひのくさひとつて一事もいひ召具とて表物もはい

秋城のゆとどごりーり奥の代わく或夜の中の日や  
あやうくとも夜臥らして是らもなき湯とあなこけうら  
川と陰浪のあも光けり又きり志先の中はさきし  
きふあすの途えのいど色一眠りうちとけさきにあふ  
しひらいてねえ物とやいさまの秋よりうらふ事言ま  
そまろく今いかに昔里と通るきりはあきらのぬり  
里い六七百里を宿するは程と宿するもとどんゆき  
ぬ事ある父といまきり今程いり居る事うんこの事  
よもいひりしはあふりおと夜集くといひおきい旅の  
志得ていけ程さあつる危うく事言はる今いけい  
卒して危き事以候ふに命今うて来んとゆり又玉汗の老  
父と違ふことの瓜をまねとまねとむあはれや杯かへん弱  
くうらうさ居るおつ時を頼るふとらきしりい旅の  
名をなせり

相携千里遠 京畿旅館夜漏燈影微  
窓外杜鵑聲切 請君細聽不如歸  
旅のいん 文字のせえ けし清方の道いし  
まをいれど実境小在りて 実境小余を是成吟  
して是を次張然とくは是より帰れいとい事とハなり  
ぬ初めは知んとする時門生等皆後人と清め結きよるる

相携千里遠 京畿旅館夜漏燈影微  
窓外杜鵑聲切 請君細聽不如歸  
旅のいん 文字のせえ けし清方の道いし  
まをいれど実境小在りて 実境小余を是成吟  
して是を次張然とくは是より帰れいとい事とハなり  
ぬ初めは知んとする時門生等皆後人と清め結きよるる

其の事小い人小の事し能依小乃かす才一太路の怨  
 し、きく小退久一相違百千里の行程をさはん弱さ者  
 是弱さ者も病の患皆あし幸若といつあ者わし  
 石洒する者り一徳魚がりのものし父母愛ある者  
 一其を許さる者り一是等の事とある光い具そ  
 一其老をぬれ一毎毎の財は被申する者居一丈原  
 といふ者孤身といふ日向日より来る者一其財と具そ  
 是は其財ハ余らあ存せし財肥後の疎麻そあるしとせ  
 一其井任流守の家小儒子候りの為小母り居るは  
 む十日の者同居さるる財は乃術とあし傳へる余ら

其井と津一其財收後ひあるしとせし其父  
 日向の事あつし、やご漫遊の事とせし其父  
 那小いし他那小物をもつと其君父小石流して所  
 小従ふの事といひし小理小休し一其後小母り居る  
 其後養育日向小母りし事其父小母り居る事ありといひ  
 一其父玄誠怒つて汝いふ事といふ一好幸は其  
 一其父其父をいふ事いふ事いふ事九州の四国も押  
 所り物多古の功と稱えん事其父怒る事あはし其父  
 の書と不送る事何と我許し成ゆん其父の事いふ老  
 人を取物し其財は其財は小母り居る事其父は涙りし

其父の事 其父の事 其父の事 其父の事 其父の事 其父の事 其父の事 其父の事 其父の事 其父の事



三三三のいづれのおり幸に同らむがばまておぼしむる  
 のまづいよーあまのいよーいよーおぼしむる一幸  
 とくといよふあまのいよふとくといよふあまのいよふ  
 の年少のいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 余山後のいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 河のいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 くけいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 橋のいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 小七十のいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 小はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ

人の執つておぼしむるはまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ  
 一はちのいよふあまのいよふあまのいよふあまのいよふ

